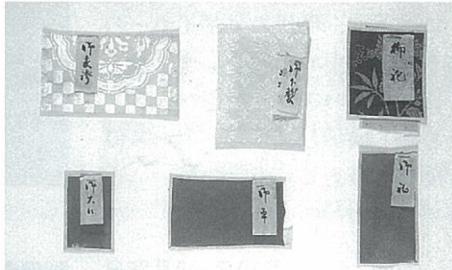
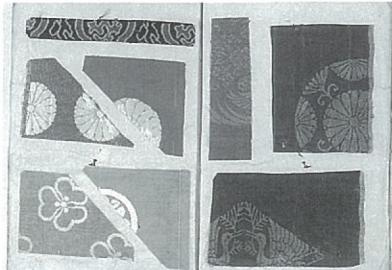


文化学園服飾博物館だより

第12号 1999.4.1



有職裂 江戸時代後期
伊藤綾子氏寄贈



振袖 野口真造作 昭和初期



イヴニング・ドレス ワース作 1890年代

◇'98年度新収資料について◇

服飾博物館の所蔵品のうちほとんどは女性用で、西洋部門ではそれが顕著です。男性の衣装は時代による変化に乏しく、また実用的で地味であることが残りにくい原因といえるでしょう。近年は男性服飾の収集にも注意をはらっています。今年は、日本の武士の用いた胴服、鎖帷子、陣羽織、イギリスの1850年頃のスーツ、中国・苗族の衣装がその例としてあげられます。

明治はもちろん戦前までも歴史として語られるようになり、博物館への寄贈のお申出にも大正から昭和初期の着物と洋服が多くなってきました。昨年度の寄贈者および寄贈品を紹介させていただき、収集へのご協力に感謝申し上げます。
■：ドレス、■：婚礼用打掛、■：有職裂・有職裂帖、
■：国民服・軍服、■：ドレス（貞明皇后着用）・搔取・帶、■：丸帯・袋帯、
■：帷子、■：インカの土笛・看板、■：ルーマニアの民族衣装、
■：ウズベク族の衣装、■：タジク族とバルチ族のドレス、■：帽子（昭和天皇所用）、
■：被布（昭和天皇の内親王着用）、■：ドレス・ケープ・扇・髪飾り（徳川正子所用）

（敬称は略させていただきました）

'98年度活動報告

◇展示◇

【西洋服飾の流れ — 女性の装い 1760～1970 —】

3月10日～4月24日

18世紀のロココ時代から現代に至る約200年間の女性のスタイルの変化を時代ごとに展示し、現代のデザイナーの作品ではC・ディオールのドレスを中心に紹介しました。また今回は19世紀半ばから1920年代のブローチやペンダントなどのアクセサリーも合わせて展示しました。ドレスに帽子や靴を組み合わせたり髪形を整えて、当時の装いに近づけた展示となりました。



19世紀の装い

【アジアの染めと織り】

7月10日～9月26日

近年のアジア・ブームの中で身近になったアジアの布を、大きく「染め」と「織り」に分け、ろうけつ染めや絞り染め、絣や紋織りといった技法別に各地域の布を紹介しました。同じ技法であっても、施す素材、使う道具、あるいは色彩感覚や模様表現によって、布に表れる表情は、さまざまです。決して楽ではない環境の中でこつこつと受け継がれてきた伝統技術が生み出した布の表現の多様性をくみとっていただけたことでしょう。



各地の絣

【洋装への道】

10月23日～11月27日

当館の所蔵品の中から明治時代から昭和初期にかけての洋装を取り上げ、洋装化への軌跡をたどりました。西洋の流行にしたがって次々とスタイルが変化していった女子服、宮中の儀式の際に着用された特別な礼服、軍服、男子服など当館の所蔵品約80点によって構成し、一昨年ご寄贈いただきました故秩父宮勢津子妃殿下の洋服も紹介しました。開催に先立ち、開会式ならびに特別鑑賞会を行い、また会期中には寛仁親王妃信子殿下、三笠宮崇仁、百合子両殿下がご来館され、熱心にご覧いただきました。

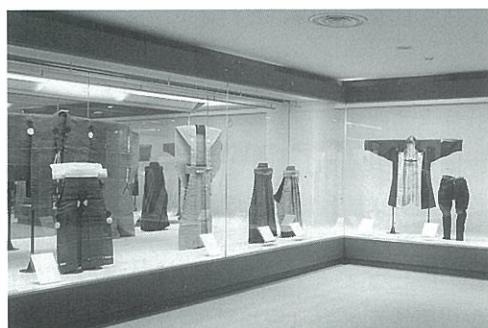


展示をご覧になる三笠宮崇仁、百合子両殿下

【脚衣 — 日本の袴・アジアのパンツ —】

1月7日～3月12日

これまで服飾を考える上で、テーマとして取り上げられることのなかった脚衣についての企画展を開催しました。日本の袴は階層によって異なる形態に着目し、公家の表袴や指貫、武家の直垂や袴、庶民の股引やもんぺなど紹介しました。アジアのパンツは、中国の褲や韓国のバジ、タイ北部のパンツ、インドのドーティー、西アジアのシャルワールなど気候風土にあった様々な形態のパンツを展示しました。



武家の袴と股引

◇館外展示◇

服飾博物館では、文化学園北竜湖資料館と文化女子大学附属長野高等学校において、所蔵資料の展示を行っています。北竜湖資料館は'90年に開館し、常設展として日本各地の郷土玩具を展示していますが、今年度は「国芳 — 奇想の錦絵 —」展を合わせて開催しました。長野高校では、毎年、文化祭期間中に展示を行い、今年度は「インドとパキスタンの染織」と題し、この地域の多様な染織品を紹介しました。



「国芳—奇想の錦絵—」展

◇韓国との国際交流

「西洋服飾の流れ 18世紀～20世紀」展◇

9月25日～11月30日まで「西洋服飾の流れ 18世紀～20世紀」を韓国牙山市の温陽民俗博物館で開催しました。これは毎年春に服飾博物館で開催している「西洋服飾の流れ」展を韓国で紹介したいという温陽側の熱心な要請で、文化財専門委員の金英淑先生のご協力のもと、温陽民俗博物館開館20周年記念特別展として実現したものです。

9月25日のオープニングには、李吉永牙山市長、展示の後援者である金宜正茗園文化財団理事長、金春植啓蒙文化財団理事長、辛璋根温陽民俗博物館館長のほか、韓国内外の服飾関係者の方々が多数出席されました。簡単な展示品の説明の後、会場を移し、韓国、日本、中国の服飾研究者によるセミナーも行われました。服飾博物館からは道明学芸室長が「日本への洋服の導入」と題し講演しました。また展覧会終了後、12月1日には韓国の服飾研究者を対象に、小宮、大橋両学芸員による時代衣装の展示方法についてのセミナーを行い、展示では見られないドレスの内部構造の解説や、着せ付けの実演をしました。中でも着装したドレスごとに製作した髪形に关心が集まり、皆、熱心に見入っていました。

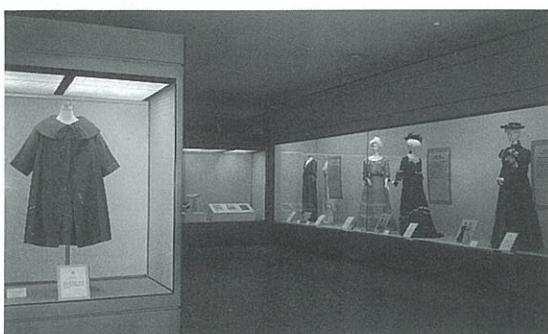
韓国で今回のように大規模に西洋服飾が紹介されたのは初めてのことでのことで、国内各地から16万人以上の見学者が訪れました。



民俗博物館正門前の「西洋の服飾」展の広告塔



オープニングのテープカット



展示室風景



髪形製作の実演

'99年度展示案内

【西洋の服飾 — シルエットと構成 —】 4月5日～5月28日

服装史を学ぶ者にとって当時の絵画や文献は優れた研究資料ですが、やはり実物にまさる資料はありません。本展では18世紀から現代に至る約200年の西洋服飾の流れを、女性の装いを中心に当館の所蔵資料で紹介します。ロココ、エンパイア、ロマンティック、クリノリン、バスル、アール・ヌーボー、アール・デコと変化していくシルエットの美しさと共に、それを形作っているファウンデーションやドレスの構成に着目し展示します。

【阿弥陀仏像内納入染織品と朝鮮朝の装身具 — 韓国の精神文化と造形表現 —】(仮題)

6月18日～7月30日

'98年の韓国の温陽民俗博物館において開催した「西洋服飾の流れ」展に引き続く相互交流として、企画された展示です。温陽民俗博物館と黒石寺所蔵の仏像内納入裂(1302年の高麗朝の貴重な資料を含む)、茗園文化財団と東洋服飾研究院所蔵の装身具を通して韓国の仏教文化の精神と装飾文化の神髄を紹介します。

【友禅東京派 50年の軌跡 — 中村勝馬・山田貢・田島比呂子・中村光哉 —】 10月9日～11月4日

東京の友禅をささえてきた四作家の代表作の着物と屏風を通して友禅芸術の確立をめざした50年の軌跡をたどります。

【アジア・母の手仕事 縫いの美】(仮題) 11月25日～'00年2月10日

文化出版局発行の雑誌、季刊『銀花』が創刊30周年を迎えます。その記念として本展では、日本をはじめアジア各地の縫いもの、刺しものを中心に紹介します。日本「百接ぎ合わせの着物」、インド「カンタ刺繡」、韓国「ヌビ(キルティング)」など、家庭で布と上手に暮らしていくための知恵が縫い込まれています。素朴ながらも力強い美しさを感じ取っていただければ幸いです。

*以上の予定は都合により変更されることがあります

○'97年に当館で開催した「遊牧の民に魅せられて 一松島コレクションの染織と装身具ー」展を
青森市と秋田市にて開催します。

5月21日～6月3日 青森県立郷土館

9月23日～10月3日 秋田県総合生活文化会館・アトリオン

文化学園服飾博物館だより 第12号

編集・発行 文化学園服飾博物館

〒151-8521 東京都渋谷区代々木3-22-1

TEL. 03-3299-2387

Home Page : <http://www.bunka.ac.jp>